

「高崎プライド」 ～心と形を整える～

令和2年10月23日（金） NO16 文責 木下 文秋

私事で恐縮ですが

私事で大変恐縮ですが、生徒にも感じてほしいことがあるので文字に起こしたいと思います。私は9月16日に父親を亡くしました。享年86歳でした。昨年9月30日に入院してほぼ一年間の入院生活の後に死去しました。死亡診断書には死因は肺炎とありましたが、わずらっていたのは腎機能不全です。コロナの影響で殆ど面会ができず寂しい思いをさせました。今は49日の法要の準備を進めていますが、名義を変更したり通帳を解約したりと膨大な事務作業に追われています。そんな中ある書類の中に見覚えのない名前を見つけました。それが誰なのか尋ねると19歳で戦死した父の長男であることが分かりました。私が長男だと思っていた叔父は実は次男だったとはじめて知ると同時に、本当の長男はすでに戦死していたこともその時初めて知りました。母親も会った事がないそうです。今日までその存在を知らずに生きてきたことに戦争のむごさを痛感しました。私としても親の面倒は最後までしっかりみるのが思返したと思える限りのことをしてきたつもりです。しかし、実際は入院していた父より、ひとりで生活をしている母親にかける時間のほうが多かったと思います。父の死を通して強く思ったことがあります。それは「人は人とのつながりで生きている」ということです。お通夜の芳名録を見ると私の知らない名前が結構あって、色々なところで多くの人の支えや励ましがあって今日まで生きてきたことが分かりました。そして、次は自分たちが、周りのお世話になった人たちにお返しをしないといけないとつくづく感じます。中学生の皆さんに「人の死」について考えてというのは難しい話だと思いますが、祖父母など身内の死を経験したことがあれば、命の尊さであったり、人間の絆であったりを感じたのではないのでしょうか。10月22日の宮日新聞に、最近では芸能人や著名人が自ら命を絶つことが続いていて、そのことが世の中に影響を及ぼしているとの記事がありました。人の命は多くの人の支えや励ましによって守られています。悩める人がいたらどうか一人で抱え込まずに、周りの人に頼ることを忘れないでください。私達は、コロナ禍で多くの制限を受けて日々生活していますが、生を受けている者として、周りへの感謝を忘れずに、しっかり生きて行かなければならないと思っています。